

Title	<図書紹介>服飾文化研究の現場報告書『東アジアにおける洋装化と洋裁文化の形成』をめぐって
Author(s)	横川, 公子
Citation	デザイン理論. 2008, 53, p. 130-131
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53527
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

服飾文化研究の現場

報告書『東アジアにおける洋装化と洋裁文化の形成』をめぐって

武庫川女子大学関西文化研究センター、2008年（附録：展覧会「関西洋裁文化玉手箱」図版・解説 CD-ROM）

横川公子／武庫川女子大学

本書は、文部科学省学術フロンティア推進事業「関西圏の人間文化についての総合的研究」（略称：関西文化研究）の一環として、2007年6月22日～24日に開催した、国際シンポジウム「東アジアにおける洋装化と洋装文化の形成」の記録を主たる内容とし、関連する周辺企画〈展示〉と〈関連映画の上映〉に関する内容を収録したものである。

共著者は合計14人である。企画の推進母体であり、同時に執筆者ともなったプロジェクト関係者の氏名を羅列的（5音順）に紹介しておきたい。青木美保子・井上雅人・酒野晶子・藤本純子（旧姓 原田）・平光睦子・松井寿・松本由香・村田裕子（旧姓 岡林）・森理恵・森田雅子・山本泉・横川公子、さらにこのシンポジウムのために招聘された韓東賢（在日）・柯雪琴（台湾）・李子淵（韓国）を加える。主なメンバーは、関西一円に在住する意匠学会会員であり、2004年から共同研究として実施されたプロジェクトによる調査研究が拠り所となっている。

そもそもプロジェクト立ち上げのきっかけは、意匠学会第45回大会におけるシンポジウム「戦後50年の服飾文化学および服飾デザインに関する概説書——服飾文化学および服飾デザイン教育の見直しのために——」の実施であった。このとき対象とされた概説書は、研究・教育者のみならず、当該領域と一般社会とをつなぐ媒体であると考えられ、その再検討によって、それまでの教育・研究が重視し取り上げてきたことと切り落としてきたことなどについて、経過や問題点を明らかにしようとした。その根底には、当該分野の研

究・教育のあり方のみならず、日本における服飾文化や服飾デザインのあり方を問い直し、その未来性を探るための手がかりを提案することにあった。この再検討を受けて、本報告書に至るプロジェクト「関西におけるファッション（衣）文化の形成——裁縫習得及び衣服作りに関する事例発掘を通して——」が立ち上げられた。今回のシンポジウムは、その一環として中間報告を兼ねた企画であると同時に、日本におけるのみならず、洋装及び洋裁を異文化として受容した東アジアに視野を拡大して国際的なシンポジウムを立ち上げたものである。

そのため本書の趣旨の第一は、東アジアの国々が固有の服装文化の中に異文化である洋装を受容し、それを支える洋裁文化を形成してきたという体験や記憶を発掘すること。もう一つは、各地域で国家ということに一般化あるいは制度化しきれない、地域の状況に応じた草の根的な洋装の受容とそれを支えた洋裁文化の形成があったのではないかという仮説に従って、個々の具体的な事例を発掘することを趣旨としている。後者は、洋装化が近代化を推進する国家という枠組みで推進されてきたという史的事実が今まで多くの注目を浴び、その点に関する学術的な指摘と蓄積も少なくないのに対して、当企画とその報告書の独自の視座である。前者についても、民族服飾の消長への注目ではなく、東アジア地域で共通に推進されている今日的な衣料産業の基盤になる洋装化と洋裁文化の形成に注目する視座は独自のものである。

テーマの前提として、今日的なファッショ

ンの解明という視点をとらず、洋装の受容と洋裁文化の形成ということに注目した理由についても触れる必要がある。ファッションを支える洋裁については、服装文化研究の視野の中でやや等閑視されてきた。あえてそこに注目した理由は、次のようなものである。裁ち縫いというのは技術であるが、洋装を実現するためには、単なる裁ち縫いの技法だけでなく、着る人間の問題や、素材や色、形態、着脱の方法をどうするのかというようなことに答えを出して掛からねばならない。ここには必然的に、実践的・実感的な価値判断が伴う。時には今までの価値をひっくり返すような革新的な実践にもなり得るのではないか。こうした営み全体を仮説的に洋裁文化として注目した。洋裁は、モノとしての西洋型衣服を入手するというだけでなく、上述のように洋服を着る生活全体と分かちがたく関わる。洋裁という営みを通して、こうした洋装を身にまとった人間像とその時代を展望する可能性を見ようとした。

さらに異文明としての西洋型衣服を受容し、洋装を中心とする生活文化を形成したという、共通の体験と記憶を持つ東アジアに視野を拡大することで、各地域のアイデンティティをより相対的な文化状況として把えようとした。

関連企画として開催した展覧会「洋裁文化玉手箱」は、プロジェクトによる調査の過程で発掘した資料を展示の中心にした。衣服はモノであり、それらは具体的にエポックを示唆する。資料群は5つのブロックに分けられた。各資料群の簡単な紹介を掲載している。

別にプレシンポジウムとして、「映画——洋裁文化の受容」という、洋裁をテーマにした戦後日本の古い映画の上映会を開催し、報告書はそれに関する内容を収録している。1960年代までのこうした映画にもエポックメイキングとしての洋裁・洋装ということ

が特徴的に熱狂的に取り上げられたことが指摘される。

シンポジウムの主な内容は、まず学校を足場にした、制度的な視野も含んだ洋装化、洋裁文化の形成の問題が取り上げられた。戦前期の洋装制服の実情について、愛媛県の高等女学校の総合的調査を手掛かりにした報告、朝鮮学校の「チマ・チョゴリ制服」の誕生をめぐる民族的アイデンティティと洋装との葛藤の問題、台湾と韓国それぞれの国家における統治の問題と洋装化とのかかわり、また東アジアを少し拡大して、プロジェクトメンバーのフィールド調査からインドネシアの洋裁文化とその担い手について取り上げた。さらに洋装化にからむジェンダーとの関係と日本の伝統衣装である近代のキモノ文化の成立との関係が取り上げられた。

企画の性格上、体系的な深化・考察は十分とは言えないが、多くの成果が上がったと思う。洋装化が内戦を含む19世紀後半から20世紀の戦争と分かちがたく結びつき、国家による統治する・されることとの関連が指摘されたこと、また作ることから着ることまで、ジェンダーとのかかわりが濃密であること、制度にならない位置での洋装化と洋裁習得への熱望があったこと、各地域に独自の西洋型衣服の受容と工夫、相互的影響関係などが指摘された。

最後に報告書では、東京や名古屋地域からのシンポジウム参加者を交えた、熱のこもったディスカッションが収録されており、研究者たちのこの問題への熱い視線が示唆されたことを付け加えておきたい。

意匠学会第45回大会シンポジウムの配布資料として、小冊子『戦後50年の服飾文化および服飾デザインに関する概説書——服飾文化学および服飾デザイン教育の見直しのために——』（横川公子・森理恵・松本由香・井上雅人・青木美保子・平光睦子・山本泉共著、意匠学会、2003.11.16）を発刊している。